

山田先生との思い出

化学研究室 片岡正光
生物学研究室 八木宏樹

この度本学を退官された山田先生は、10年間の長きにわたり学長として本学の舵取りに日夜邁進されたご業績が顕著であることは明らかであります。学長としてのご業績等は秋山現学長の稿に譲ることとし、ここでは山田先生の教育・研究に関するご業績やお人柄などについて紹介することに致します。なお先生の生物学者としての研究業績等の紹介は、山田先生の後任の八木先生にご執筆いただきました。

山田先生は、北海道大学大学院理学研究科植物学専攻のご出身で、博士課程を中退後同助手として採用され、講師等を経て昭和54年に本学一般教育等生物学の助教授に着任されました。平成2年に私（片岡）が本学に赴任したとき、先生は本学併設の短期大学の主事として活躍されていました。

先生に学内ではじめてお会いしたのは、私が赴任して間もなく短期大学部主事室を尋ねたときと記憶しております。先生はお忙しそうに書類に目を通しておられましたが、手を止めてにこやかに私を招き入れて下さいました。そして理系畑で育った私に、文系大学における講義や研究の進め方などについて優しく手ほどきして下さいました。その上、「北大で展開してきた研究を本学で続けるには、試薬や機器を購入するお金が必要でしょう」と、先生の研究費を融通して下さいました。お陰様で着任してすぐに研究を継続・発展させることができ、たいへん有り難いことと今でも深く感謝しております。

先生のご専門と私の専門の環境分析化学は水を接点としており、共同研究をして先生の学問や研究に対する取り組み方や対処法、解析方法などを吸収させていただきかけたのですが、山田先生の6年間にわたる短期大学主事に引き続く10年間にわたる学長の激務の下では、共同研究を実現させるに至

らなかったのは返す返すも残念です。

また学問を離れた趣味の世界でも、釣りや山菜取りなど重なる部分が多かったにもかかわらず、ご一緒する機会に恵まれず残念です。

さて、山田家正先生のご専門は海藻学で、北海道大学理学部では海藻学の第一人者であった山田幸男先生に師事されておりました。同じ山田姓でしたので、海外の研究者からはグレート・ヤマダ、スモール・ヤマダと呼ばれたり、グレートの子供と間違われたりしたそうです。海藻群落の研究の他、種分類群の形態と分布の問題についても、寒流域の斬深帯に生育する褐藻コンブ科アナメ属を材料にした研究に長年取り組んでこられました。外部形態、葉状部の内部形態、生態、交雑実験などから北部太平洋を中心とした個体群の解析を試みた独創的な研究成果を挙げられておられます。

小樽市の忍路（おしよろ）湾をフィールドにしていたことから、大学院修士課程の時代には忍路の大忠寺に1年間下宿し、毎日、北海道大学忍路臨海実験所に通い詰め、自ら船を操り、また、スキューバ潜水を行って、海藻の成熟期や群落形成の過程を解明したことは、自然科学の研究者の手本となる姿でありました。海藻のフィールド研究は一朝一夕に出来るものではありません。潜水による海藻調査は、北海道では山田先生がおそらく初めてで、潜水の基本から、操船技術、調査方法、水中写真の撮り方など、門外漢からみると想像ができないほどの様々なご苦勞の積み重ねがあったものと思われます。また、海でのフィールド研究は常に危険が伴い、天候の変化に気付かず、忍路湾の追い波に揉まれながら実験所に戻ることもあったと聞きます。さらに、博士課程の時代には小樽に住んで、バスで忍路に通われていました。現在と違って学生が自家用車を持つ時代ではありません。調査に必要な機材は大きなりゅックに詰めて毎回運ばれていたそうです。これらの努力と忍耐の結果が先生の学位論文に凝縮されており、先生の業績集は同実習場に末永く保管され、現在でも後学の徒の貴重な資料となっております。

海藻がご専門の先生ですが、海藻以外で特筆すべきはマリモの研究です。理学部時代にマリモの共同研究を行っていた故・阪井与志雄教授の遺志をお継ぎになられて、「マリモの科学（北海道大学図書出版会、1992）」を出版されました。これまで総説がなかったマリモについて、分類から分布、生態、生理などを明らかにし、故・阪井先生原稿を山田先生が全面的に書き換えたり、新たに作図したりして出版に至りました。特別天然記念物である阿寒湖のマリモの研究は今でも阿寒町で受け継がれておりますが、このような分野でも山田先生は活躍されています。

小樽商科大学の授業で忘れてはならないのは、山田先生が担当された忍路での生物学実習です。もともと北海道大学や北海道教育大学と共同で始められた実習ですが、生きたウニを用いて人工授精を行い、学生は受精の瞬間から卵割を経てプルテウス幼生に至るまでの発生過程を観察するという内容でした。多いときは500人以上の学生に、それぞれたった2時間ですべての発生過程を実際に顕微鏡でみせるという、日本はおろか、世界でもまれでユニークで、おそらく世界で最大規模の臨海実習を続けられました。忍路湾におけるウニ発生の季節が小樽商科大学の夏休み直後にあたるという、地の利に恵まれたこともあります。が、「社会科学系の大学で生命の仕組みをみせることが大事だ」との信念の基に続けられており、その結果、多くの学生が卒業後も生物学実習のことを話題にするという印象深い授業となったわけです。日本人二人目の国際生物学賞を受賞した柳町隆造博士が「生殖生物学の分野に進んだのは、忍路臨海実験所でウニの受精をみたことがきっかけである（AERA Mook, Vol.35, 1998）」と言うほど、滅多に経験できない生命の仕組みを学ぶことが出来た商大生たちは幸運であったと思います。

山田先生の小樽商科大学における教育や研究のご経歴は、いわゆる「短大時代」に大きく変わっていきます。昭和61年には先生は小樽商科大学に併設されていた短期大学の主事となられ、その後部長として通算3期にわたっ

て活躍されるのですが、この頃から大学の運営や学生の生活のためにご尽力されることになりました。当時、短期大学の学生はとくに男子学生の就職が難しく、小樽商科大学のパンフレットを持って小樽や札幌の企業に学生の就職先を求めて奔走されていた姿が印象的でした。さらに、平成4年からは学長として大学改革や国際交流など、大学運営に大きな力を注いでいたことは言うまでもありません。忍路で小さな船を操っていた学究の徒は、いつの間にか、小樽商科大学全体の舵を操る船長となっていたのです。

学長として多忙な日々を送っていた時代にも山田先生は常に自然科学者であられたように思われます。自然科学の小さな集まりでは、余り学長の仕事はお話なされず、植物のこと、動物のこと、海のこと、気持ちはいつも新進の海洋生物学者でありました。ご退官されても今だに多くの役職に就き、忙殺の日々を送られているようですが、ご健康に留意され、大好きな研究を続けられることをお祈り致します。